

日本人の れもの

京都、こころここに

vol.19

時代が変わった」という言い方が好きではない。

昔がよくて、今は悪くなったという言い方で現在の状況を批判したくない。人の心や生き方はそんなに変わらない。

振り返るほどよくなった時代よかった時代などなかったのではないのか、と思ってしまう。

現代社会では、家庭の崩壊がとりざた



されるが、戦国時代は親兄弟で戦い、殺し合った。児童虐待より悲惨な赤ん坊の聞きかたがふつうに行われていた。武家社会では賄賂が横行していたし、奉行所は拷問によって容疑者を取り調べていた。



山間を流れる川。日本人はいつから論争を避けるようになったのか...

議論する姿勢

作家 山本 兼一さん



やまもと・けんいち 1956年、京都市生まれ。同志社大学文学部美学及芸術学専攻卒業。出版社勤務の後、フリーライターを経て作家に転身。長編デビュー作は2002年の「白鷹伝」、04年に「火天の城」で松本清張賞、09年には「利休にたずねよ」で直木賞受賞。

題などはいったって少ない。人が気づいていなかったか、気づいていなかったフリをしているだけの話である。

和やかに調整
総意をまとめた
「原点」はあるが

日本人の民族的な特性について考えるとき、わたしは民俗学者宮本常一氏の『忘れられた日本人』を思い浮かべる。

この本には、かつての日本人の農漁村での暮らしが描かれている。なかでも大いに考えさせられたのは、対馬の漁村での寄合の様子である。昭和20年代か30年代のことらしいが、おそらく、日本では数百年前から、そんな寄合がどの村でも開かれていたと思われ。

宮本氏が漁村に伝わる古文書を見せてほしいと頼むと、各浦から総代が集まって来て寄合が開かれた。皆、羽織袴に扇子を手にした礼装で、手漕ぎ舟で時間もかかる浦からも集まって来たのである。

その寄合は、じつにのどかである。話がときに脇にそれても、だれも文句を言わない。議題や出席者などについても関係あることなら、すべてが話題となる。

古文書を見せるか見せないかのことから数時間で結論が出たが、これが村の大事となる。そのほかには、延々と三日くらい平気で続く。そのあいだに簡単な食事が出るし、近所から帰りたい者は帰ってまた来る。その場で眠る者もある。そんな風に話し合いを続けて、みんなもうなにも言うことがなくなってしまう。総

意としての結論を出す。これが、日本的な民主主義の原点であろう。議論というよりも、利害の調整である。現代の政党が首班選挙前に、候補者の調整をおこなうのと同根であろう。

巨大国家の大事を決定するには
足りない

日本人が忘れてしまった原点に帰るべきだと唱えるつもりはさらさらない。むしろ、逆である。こういう集まりは、村の寄合にはふさわしくとも、巨大国家の大事を決定するのにふさわしいシステムではない。まったく新しい問題である原発の存続を議論するなどはまことに不向きである。日本人が忘れていたのは、イデオロギ

「寄合」に戻れとは言わない： イデオロギーと政策を真摯に

戦後、日本人は物の豊かさや引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)



いまからでも遅くない。そんな政治姿勢を育てるべきだと考えている。

35年のヨーロッパ生活、「日本人です」というと、京都は世界で一番美しい町と言った。

私もそのように考えたいと思っていた。クロードルが作った関西西田学園の庭には噴水があり、池も泳いでいた。それも無くなり、町屋敷を見ているのになんか胸が痛む。いつしかそこには何があったのかさえ忘れた。そして、普通の美しいコンクリートのビルディングや、不揃いのアメリカ風のつまらない家々がこの京都に建つ事すら私の想定外だった。

先日「都々逸」を聞いた。言葉のおもしろさもあるけれど、弾いておられる二味線の音、まるで魅入られるような繊細な音と絶妙な間……。今はみんな絶叫している。音楽も大きな音を生かしている。心に触れる、繊細でいながら心に深くしみいる音楽を見つけた。まだ残っている。と、ホッとした。ドレミと規則正しいリズムを学び過ぎたかも知れない。その外には無限の広場があることをクラシック音楽の演奏家達も感じている。固定観念に縛られている日本人は何処か寂しい。

日本の暦

(11月8日)

この日から立春の前日までが、暦の上では冬。天明7(1787)年に大文豪が著した暦の解説書『暦便覧』には「冬の気立ち始めて、いよいよ冷ゆれば」と説明されている。太陽の光が弱まり、日脚も短くなり、木枯らしが舞うなど、まさに「冬の気」が満ち始める時。また11月初の亥の日は「火入れ」の日で、この日初めて火鉢や炬燵に火を入れ、住まいの暖房を始めます。茶室では炉を開き、炉開きの茶会でうれしく冬を迎えます。

リレームッセージ



ヴァイオリニスト
・長岡宗室内アン
サンブル音楽監督
森 悠士さん

35年のヨーロッパ生活、「日本人です」というと、京都は世界で一番美しい町と言った。私もそのように考えたいと思っていた。クロードルが作った関西西田学園の庭には噴水があり、池も泳いでいた。それも無くなり、町屋敷を見ているのになんか胸が痛む。いつしかそこには何があったのかさえ忘れた。そして、普通の美しいコンクリートのビルディングや、不揃いのアメリカ風のつまらない家々がこの京都に建つ事すら私の想定外だった。

先日「都々逸」を聞いた。言葉のおもしろさもあるけれど、弾いておられる二味線の音、まるで魅入られるような繊細な音と絶妙な間……。今はみんな絶叫している。音楽も大きな音を生かしている。心に触れる、繊細でいながら心に深くしみいる音楽を見つけた。まだ残っている。と、ホッとした。ドレミと規則正しいリズムを学び過ぎたかも知れない。その外には無限の広場があることをクラシック音楽の演奏家達も感じている。固定観念に縛られている日本人は何処か寂しい。

次回11月13日のメッセージは、京都府立大学キャンパスライフ アドバイサーの藤吉紀子さんです。

(日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ
http://kyoto-np.jp/kp/kyo-np/info/nwc/11/をご覧ください)

おいしいお茶お詰めは、 京都福寿園でございませう。



CHA研究センター 京都府木津川市相楽台3-1-3 (関西文化学術研究都市内)
TEL 0774 (73) 1200
本社/山城工場 京都府木津川市山城町上御東作道11
TEL 0774 (86) 3901
http://www.fukujuen.com

京の茶に学ぶ



京の茶に出会う



京の茶に感じる



京都本店

京都市四茶通富小路角 TEL 075 (221) 2920
5階 京の茶具(茶器と茶道具) 4階 京の茶庵(本格茶室と立礼喫茶)
3階 京の茶膳(宇治茶とフランス料理) 2階 京の茶寮(宇治茶の甘味・軽食)
1階 京の茶舗(宇治茶のオリジナルギフト) 地下1階 京の茶蔵(宇治茶のMy Tea工房)

http://www.fukujuen-kyotohonten.com

宇治茶工房

宇治茶文化(お茶づくり)を
ご体験ください
宇治市宇治山田10番地
(宇治川朝霧橋決)
TEL 0774 (20) 1100

宇治茶菓子工房

宇治茶銘菓「宇治のみどり」を
お楽しみください
宇治市宇治蓮華35
(平等院表参道)
TEL 0774 (28) 6810

http://www.ujikoubou.com